

清淨華院藏古文書考證數件

石橋誠道

第一、御所日記 壹卷

清淨華院に御所日記と稱するものが一卷ある。卷子本で、その外題には、『御所御日記書拔、本山清淨華院緣起』と記されており、内題には、『本山清淨華院記錄』と書いてある。この中には二十二篇の斷片的記錄が載せてあり、その各篇の終には、殆んどみな『正長二年仲夏日、慧照國師』と記されてある。この慧照國師は清淨華院の第十世佛立慧照國師の事で、等親上人字は僧任と曰つた人である。この人は淨華院の歷代の中では最も有名な人であるが、この人が正長二年の夏日に御所の御日記や、萬里小路家の日記の中から淨華院に關する部分を抄録されたものと思はれる。それはその第一篇の終に註して、『御所御日記』と記し、第二篇の終の註に、『是時房於禁中日次記寫、萬里小路家^る在物也』と記し、第三篇の註に、『萬里小路家時房記文寫畢』と記し、第五篇の註に、『是家記錄也』等と書いてあるからだ。等親上人が自身自ら國師と書いておかれたとすれば、少しおかしくも思はれるが、其は始め上人が慧照と書いておかれたものを、後人の誰かが轉寫した時に、上人を尊敬するの餘り、國師を書き加へたものと見れば、それは不合理ではないかと思う。

而して第二十篇までは國師が書かれたもので、第二十一篇と第二十二篇とは、後人の何人かが書き加へたものと

思う。其は第二十篇の終に、『昔記日次、萬里小路家有寫置者也、正長二年夏日、慧照國師』と書いてあるからだ。然るにその後の第二十一篇には、國師の代から盛運に趣いた事、國師が頻りに昇進された事などを記し、第二十二篇は、今現に淨華院の所藏である國師の御肖像畫に書いてある贊文であるから、この二篇は誰れか後人が書き加へたものと思はれる。この御肖像は時代が甚だ古い爲に、剝落して不明の文字が多々あるが、日記の文字と對照して、その贊文を記載しておく。

淨華第六世。松林院栖賢。安養院等熙任上人壽像贊。

深ニ松林千歲根於黑谷ニ。創ニ蓮社ニ六時雨ニ於淨華ニ。上ニ正覺場ニ成ニ正覺ニ。戒珠無瑕安心起行。

欲レ生ニ我國ニ則我國不レ退。寶瓶貯ニ八功德水獲ニ之釋迦ニ。一朝國師恩衣色。以映ニ肩上袈裟ニ。嘗ニ其法乳ニ者衆多。空群之龍種咸生ニ渥洼ニ。因誦ニ一偈ニ曰。

讚揚難ニ盡算ニ河沙ニ。利劍光明笑ニ莫耶ニ。一到ニ彌陀安養界ニ。元來是我法王家。

文安三年正月十一日

內大臣正二位 藤原朝臣印本

この中意味が通じ難いと思はるゝ句があるが、原畫が不明瞭であるから致し方がない。又上人は第十世であるのに第六世と記すは向阿上人から起算するからだ。任上人と云は僧任の任である。又內大臣とは萬里小路時房である。即ち時房が國師の御肖像に自ら贊文を書かれたのである。この贊文は日記の贊文とは少し違つた字があるが、繁雜になるからその考證は省略する。又この日記の最後に、『維時元祿六年歲次癸酉初冬下浣夜亥子三刻之間書留者也、蓮池堂』と書いてあるが、この蓮池堂は誰人かよく解らない。又この原本があるかないかは不明であるが恐らくは

ないであらう。而してこの日記の中に、法然上人の選擇集の下書などの事を書いた一篇があるから参考の爲に抄出する。即ち第七篇の文に曰く、

予元祖法然上人所持、道具不_レ知_レ數、亦夫、上人自筆自作之者、第一金色名號、替の地の名號、御書七箇問答、選擇集下書、顯光院より此寺へ參候金剛寶戒血脈の譜、戒儀叡山北礪黑谷の古本、大原對決の記、天下知識歸伏の證文、明遍僧都へ示しの文章、慈鎮和尚と兩吟の詩歌兩筆の物、天台四教名目、上人經論書籍亂本數卷あり、聖光授手印、良忠筆跡亂れてあり、一枚の消息三紙あり、聖光へ遣シキ選擇下書あり、其上自作の阿彌陀之像、不動、舍利塔、持蓮華自作也、總而大事の靈寶箱之事へ松林院、無量壽院、此家に沙汰可申也、土藏は不斷光院、智慧光院よりさばき可申也、江州坂本法藏院書籍藏は、觀音寺可_三守護_一也、從_レ昔例如此、天台一代書物藏七間四方、將來之道具皆以此藏にあり、寺官節々法藏院へ可_三見舞_一者也

正長二年仲夏日

慧照國師

以上は第七篇の文であるが、この中選擇集下書とは廬山寺のそれと關係ありや否や、金剛寶戒血脈譜とは後に記す了惠上人の圓戒譜と同か異か、聖光授手印、良忠筆跡とは後に記すそれではないかなど種々の疑問が起つて来る。今それらを一々考證する餘裕を持たないから暫く疑問として留めたい。

第二、淨土要略抄一卷、并に心行雜決一卷

本書は續淨土宗全書第四卷に收められてあるが、其奥書から考へて、昔は淨華院にあつたものと思う。然し今は淨華院には存在しない。續全第四義山上人の序文を記せば、

『頃日予古藏の中に於て偶ま一書を得たり、題して淨土要略鈔と曰ふ。即ち向師の祖述する所なり、卷を披くに淨芒詞林を射て華鮮かに、義を尋ぬるに心行毫端に出て泉の如く湧く、行者の龜鑑なり。又心行雜決一卷あり、乃ち向公の師範禮師の述する所にして亦た宗門の要領なり。予日西山に薄まる、この外又何をか慮らん、乃ち烏焉を校正して合せて以て梓に壽す、庶幾くは願求の徒、西邁の目足たることを得ん。(原文漢文)』

寛永二年十月六日

華頂義山書

と記されてあるから、義山上人が始めて出版して世に公にされたのである。而して淨土要略鈔の標題の下に、『於先師禮阿上人法語中略出』と記されてあり。又最後に、『於先師禮阿上人開示諸人法語之中、略抄其最要者、以備淨土行人之龜鑑者也、釋向阿在判』とあるから、禮阿上人の法語の中から、最も肝要な部分を、向阿上人が抄出されたのであることは明かであり。又心行雜決の最後に、『此書者、先師禮阿上人、奉新陽明院御問、所注進也、其題目者、後時小子自安之而已、釋向阿在判』と記されてあるから、禮阿の教義を永く後世に傳へんとて、向阿上人が寫しておかれたことは明らかである。

所が今余が特に注意しておきたいことは、滋賀縣安土の淨嚴院に、『西谷禮阿上人御作拔書』と題する一卷の冊子がある。これは滋賀縣金勝の阿彌陀寺の開山隆堯法印の眞筆である。この本の最後に、『干し時應永三十癸卯季中秋下旬之比、於江州金勝寺谷草庵、依明阿所望、寫之者也、右筆沙門隆堯』と書いてある。而してその内容は、淨土要略抄并に心行要決と殆んど同一であるが、修辭に於て少し異つた所がある。これは恐らくは向阿上人が名文家であつた所から、多少の修飾を施されたかも知れない。或は又義山上人が出版さるゝ時修辭を加へられたかも知れない。所が隆堯法印の拔書を見ると一層原始的である。だから隆堯の拔書は禮阿の法語そのまゝではあるまいか

と思はれる。何れにしてもこの法語が今尚ほ保存されてある事は、實に貴いことである。希くは永遠に残したい。少くともその隆堯本の複本があつてほしいと思う。因に應永三十年は、向阿上人が遷化されてから（貞和元年遷化）、約七十五年の後である。

第三、往生至要決、一卷

本書は法然上人以來の相傳本として傳へられたのであるが、主として向阿上人が自ら書いて多くの弟子に相傳されたものである。この本は現に今三本が傳へられてある。その中淨華院には、大小二本あつて宗寶に指定されてある。京都の華開院にもまた一本がある。

先づ淨華院の本から言へば、

第一の大本は、卷子本で紙質も極めてよいものであるが、本文の中起行を述べる下で脱落があり、奥書も亦た錯簡があるので、其全貌を知ることが出来ないのは、誠に惜しい事である。

第二の小本は、これ又卷子本で、大本に比べて紙質はやゝ劣るが本文は完全であり、續全第四卷に載するものよりも更に多くの文がある、依てその異本として全文をこゝに掲げたいと思う。

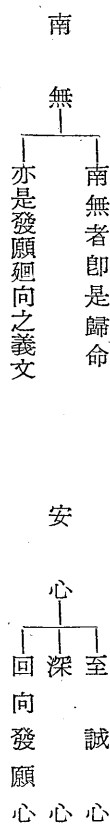
第三は華開院所藏の本であり、この本は向阿上人の眞筆である。この本に就ては藤堂祐範君が知恩院の專修學報第十二號向阿上人特輯號でその研究を發表されてあるから、今は之を省略する。

淨華院所藏の小本の全文は左の如くである。

往生至要決

(原文濁點を施さず故に今除く)

南無阿彌陀佛



南無といふは歸命也、歸命と云は佛たすけ給へとおもふ心也。この助たまへとおもふ心に三心はをのつからそな
 わる也。去る故にまことしくたすけ給へと思つていつわらざるは、これ至誠心也。一すちに佛願を憑て疑はざるは又
 深心也。助給へとおもひて名號を唱は則廻向發願心也。されは三心をはつかねて南無の二字に習入るゝ也。口に南
 無と唱るは心に助給へとおもふを云ひあらわす詞なれば也。

阿彌陀佛

起行

是名正定之業
 順彼佛願故文

彌陀の名號は往生の定業也。彼の佛の本願に我が名を唱へはかならず生せしめんと誓れたるに依て、南無阿彌陀
 佛を唱る聲はみな此願に順するが故也。されは上一形をつくし、下一念にいたるまで、往生極樂の定業にあらずと
 云事なし。この故に他力往生の至要をは、彼佛の願に順する故の一字に習きわむる也。爰以往生極樂の爲には、こ
 の本願をよるゝの事の故とする也。

以上淨土一宗の法門安心起行の肝要をは、此三字に習きわむるを祖師正流の口傳とす。此外またく別の子細なし。
 則釋迦彌陀を仰て證誠としたてまつる所也。然は人みな心に助け給へとおもひて、口に南無阿彌陀佛と申さは、佛
 の願力に依が故に、決定往生すべし、聊も疑へからず。法然上人より先師禮阿に至まで、此掟をまもりて悉く往生

を遂をはりぬ。又現證にあらずや、ゆめゆめ此相傳をかるしむる事なかれ。

源空上人

— 辨阿 —

— 然阿 —

— 禮阿 —

— 向阿 —

— 玄心 —

— 弘玄 —

專妙

長玄

— 洞妙 —

今五代相傳の法門をつぶさに一卷の記錄に載て僧玄心に授る所、たしかに十方の諸佛をもて證明としたてまつる者也。

延元々々年五月二十四日

沙門 向阿 在御判

淨土の法門諸流異義を存す。其中に當流のみ只祖師の傳をまったくせり。然に近比當流の中に又しきりに新義をかまふる輩あり、かたましく相傳と號し、偽て先聞と稱す、そのくわたて耻つへし。爰に先師祖承をつぶさにする事、當流に獨歩せり。弟子又その傳をまなふる事聞ひさし、しかるに今耳にふるゝあやまりを悲て、心にのこる趣をしるす。見む人さためてあさけらむ者歟。但佛をもて證明としたてまつる、いつわらぬ所しりぬへし。今和字をもちゐる事は、義におきてあやしみなく、又おろかなる輩におよはしめむとなり。

于時延慶第二の年卯月五日記之

沙門 向阿 在御判

弟子根鈍にして其性つたなしといへとも、先師上人にあひたてまつりて深旨をきく事二十余年、又奥義談する事四十餘廻也。よて淨土の法門にをいてあやまりあるへからず。故今肝要の義をもて比丘尼專妙にさつくる者也。然則心行の至要として順次の往生を決定すへきをや。

至德二年八月二十九日

淨土宗七代沙門弘玄 花押

此一巻先師空覺和尚、ことはをそへて比丘尼專妙にさつけらる。則この書をもて比丘尼洞妙に許授處也。然者この奥旨を受持して順次往生を決定すべき者也。

嘉吉元年三月九日

沙門長玄花押

源空上人

辨阿——然阿——禮阿——向阿——玄心——敬法——等觀——良尊——玄周——等悅

右往生の法もん、この一巻にのせらるゝところ也。しかるに比丘尼等悅にさつくる者也。すみやかにあん心決定して、往生極樂すべき者なり。

文明十七年二月二十九日

沙門玄周朱印

以上で終つておるが、本書の相傳は、玄心の弟子の弘玄が、相傳の傳書として言を添へて至徳二年に專妙に授け、其後嘉吉元年に、弘玄の弟子の長玄が、又言を添へて洞妙に授けたものである。所が先の弘玄は淨華院の正統ではなくて傍系であつたが、今度はその正系の玄周が言書を添へて比丘尼等悅に授けたものゝようである。そこで再びこゝに系譜を書き加へたのである。

第四、鎮西上人筆授手印 一巻

此授手印は卷子本で、函の蓋には聖光上人直翰授手印と書いてある。此本は林彦明上人が專修學報の向阿上人特

轉號に於て述べられた通り、多くは後人の添補であるが、唯だ僅かに本文の數行と、血脈と、上件文證云々の文書は確かに國師の眞筆である。又この本には、他の本には全く記されていない、念佛數遍を本とする國師の主張が記されてあるので、我宗としては極めて重要な文書であることは、林上人が縷々述べられてある通りである。又その奥に記主上人の證明文が記されてあるが、これ又記主の眞筆である。記主上人の眞筆は、極めて稀であるにも關らず、今現にこれが残つてある事は實に宗門の幸である。林上人の昭和訂末代念佛手印圖版第十三にそれが載せられてある。

第五、幡隨意上人眞筆傳書切紙 一枚

かの鎮西上人眞筆授手印の函の中に、幡隨意上人の眞筆で、淨土宗の傳書に關する記事の斷片が藏められてある。その文は左の如くである。

右此授手印者、面上之十念口授相承之時者片手印、左手_ニ右字_ヲ書事深々祕密之作法傳授有之也。宗脈都部之時亦兩手印畢。此時自證化他共令_ニ満足_一、左手_ニ左字_ヲ、右手_ニ右字_ヲ、是名_ニ甚深之作法_一相承在之、能々可傳者也。

慶長四年_在 亥霜月十日

上州佐貫莊館林郷終南山善導寺

鏤 隨 意 花押

慶長四年の頃は、幡隨意上人が館林の善導寺を再興する爲に、非常に苦心されつゝあつた頃であるが、その頃の筆蹟が如何なる事情で淨華院に傳つたかは能く解らないが、宗史傳法の上から重要な資料が傳つてゐることは悦ば

しい事だ。又幡隨意の幡の字に、鏤を用ひられたことも注意すべきことである。

第六、向阿上人眞筆授手印 三卷

向阿上人の眞筆の授手印で、現存するものが五本ある。即ち第一玄心傳承本、清淨華院藏、第二忠空傳承本、宇和島大超寺藏、第三清源相承本、清淨華院藏、第四是觀傳承本、清淨華院藏、第五欣淨傳承本、三重縣念佛寺藏、以上の中三本が淨華院に保存されてゐることは、宗門の爲に實に喜ばしい事である。而してそれら三本は幸にして何等の損傷もなく、殆んど昔のまゝであることは尙は一層の悦である。その内容の詳細は林上人の昭和新訂末代念佛授手印の中に委く検討されてゐる。

第七、望西樓了惠眞筆圓戒譜 一卷

本書は高一尺一寸二分、全長十尺五寸の卷子本で、表装は金銀の切箔雲形模様の斐紙が用いてある。扉は銀の切箔で今はやゝ變色して黒味を帯んでゐる。軸は金鍍金の銅であり、紙は良質の鳥の子で大變立派に出来てゐる。外題には『圓戒譜』と書き、其下に小切紙に『望西樓了惠筆』と書いて貼つてある。内題は墨書で、『天台圓教菩薩戒相承師々血脈譜一首』と書き、其の右の傍に朱書で、『內證佛法相承師々血脈譜』と書き、其下に小字で、『或本無此一行』と書いてある。而してその系譜は、蓮華藏世界の盧舍那佛を始として、逸多菩薩、羅什三藏、南岳大師、智者大師と次第し、次で章安、智威、慧威、玄朗、湛然、道邃とし、道邃の下で、最澄、義眞とし、最澄義眞を合して慈覺と次第されてゐる。その後は、慈覺、長意、慈念、慈忍、源心、禪仁、良忍、叡空に至り、叡空の下

で二流となり、

第一流は、叡空、源空、辨阿、良忠、了恵と次第し、

第二流は、叡空、信空、湛空、覺空、了恵と次第し、更らに又源空の下で三流となり、

第一流は、源空、辨阿と傳へ、第二流は、源空、信空と傳へ、第三流は、源空、湛空、慈明、了恵と傳へたものである。

此の如く了恵は三流を完全に相傳した、最も造詣の深い圓戒學者であつた。了恵が三流を相承した年月は、最後に朱書で記されてある。即ち

弘安七年^{甲申}七月二十九日二更^{亥刻}、於洛陽萬壽禪院方丈佛前、奉值覺空上人、傳受相承畢。師善悅授許可狀竟、自筆而有判矣。

建治三年^{丁丑}十二月三十日二更、於洛陽華藏寺、奉值慈明上人、相承之。

弘安二年^{己卯}十一月二十九日、奉值先師良忠、受之。(以上朱書)

次に墨書で左の文がある。

文保元年二月十八日初更、奉授

沙門隆恵畢

望西樓沙門了恵

花押

以上は墨書であるが、此下に確かに血書と思はるゝ左の文がある。

文保元年二月十八日初更、於洛陽五條坊門大宮悟眞寺方丈佛前、奉值先師了惠上人、受之。

この文は隆惠が本卷を相傳して感激の餘り、直ちに自身の身肉を刺して血液を取り、その血液で書いたものと思はれる。其は能く注意して見ると、前の朱書とは其色が全く異り、肉眼でも血液の書であることが能く解る。

以上の記事で此卷は終つておるが、更らに前に遡つて、慈明が湛空から相傳を受けた系譜の下に朱書で左の文がある。

建長三年^{辛亥}七月二日初夜二更^{亥時}、天台圓頓大戒、於二尊院方丈、奉傳受之、菩薩比丘慈明。

と記されてある。又この卷の裏書に、墨書で二の系譜が記されてある。

第一は即ち釋迦文佛、摩訶迦葉、阿難、商那和須等二十五人を経て、菩提達磨に至り、慧可、僧璨等二十餘人を經て榮西に至り、榮西、道聖、了心、慈明に至て了惠に相傳す。

第二は釋迦文佛、阿逸多等二十餘の菩薩を経て羅什三藏に至り、羅什から南岳、智者、章安等から最澄に至る系譜である。それは最初に記したものと同一である。因て了惠は禪家の戒系をも繼承した譯である。

又慈明上人の相承に就て、この卷の裏に朱書で左の文がある。

慈明上人又受知恩寺性道法師^{明見}、建長三年^{辛亥}校鍾中旬涅槃會日、於備中國富坂伽藍院、初夜二更傳受畢、慈明。

と記されてあるが、この性道法師の系統傳記等は明かでない。又前に述べた如く、了惠が弘安三年萬壽寺の覺空上人から相傳した事は、了惠の著書、天台菩薩戒義疏見聞第一に記されており、其内容は全く一致してある。

以上大略了惠の圓戒譜の概要を述べたが、此書が果して了惠の眞筆であるか否かに就ては、此下で暫く考證したいと思う。現在了惠の眞筆と稱するものが凡そ四本ある。第一清淨華院所藏の圓戒譜、第二廣島市嚴島光明院所藏

の圓戒譜、第三福岡市博多善導寺所藏の末代念佛授手印、第四滋賀縣新知恩院所藏の末代念佛手印である。此等の諸本を比較對照して見ると、明かに了惠の筆蹟であることが確認される。特に博多の善導寺の授手印は、了惠が其弟子隆惠に相傳した本で、其奥書に、『正和六年^{丁巳}正月二十日、望西樓沙門了惠、以自筆傳授之花^押』と書いてある。既に自筆を以て之を傳授すと書いてあるから（林上人の昭和新訂末代念佛授手印圖版十九參照）、是れが誰れかの模寫でない限り、了惠の自筆であることは疑いない。所がこの筆蹟を極めて入念に考察するに、何れの點から考へても、模寫でない事は明かである。既にこの本が了惠の眞筆であるとすれば、それを基準として他の諸本をも考證することが出来るのだ。而して今淨華院の圓戒譜と比較對照して見るに、全く以て一致する。即ち字體、運筆、花押等符節を合するが如きものがある。特に淨華院の圓戒譜には、最後に隆惠が血を以て書いた血書の一文がある。この血書こそ了惠の眞筆を一層有力に裏付けするものである。但し本卷全體を了惠が書いたものであるか否かはやゝ疑問がある。或は譜圖の大體は誰れか助手人が書いたかも知れないが、少くとも最後の朱書の弘安七年^{甲申}七月二十九日から、望西樓沙門了惠花押までは、確かに眞筆であると思う。

以上淨華院の古文書に就て、大略私見を述べ終つたが、更らに忠實な學者諸君が、より明確に一層考證を進められんことを切望する。（大本山清淨華院法主）

